The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	哲学者は如何にして知を愛したか : 後期ニーチェ思想における道徳・身体・知恵
Author(s)	生島, 弘子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55690
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　生島弘子　　）	
論文題名	哲学者は如何にして知を愛したか ー後期ニーチェ思想における道徳・身体・知恵ー

論文内容の要旨

本論文は後期ニーチェ思想における道徳批判を扱うものである。これを対象とするのは、これが後期ニーチェにとっての最大の課題であり、また広い射程を備えている為である。ニーチェによれば道徳とは、日常的にそれと見なされる領域を超えて、学問に、あらゆる思考に、精神的のみならず身体的諸活動に、人間の生の全体に関わる問題なのだ。全体は三章から成り、先ず道徳について、次に身体について、最後に知恵についてと展開する。各章は次の三つの問いを主題としている。一、人は如何にして現にあるところのものになるか。二、己がどのようなものであるかは如何にして知られるか。三、己が誰であるかを知ることで人は何になるのか。

人は如何にして現にあるところのものになるかを問う第一章が手掛かりとするのは道徳である。此処ではニーチェ思想の根本をなす幾つかの重要概念を考察する。先ず第一節では道徳と生との関係、及び貴族道徳と奴隷道徳という対概念を利用してなされる道徳批判の述べるところとその批判の意図を論じる。ニーチェは道徳を、それへの服従によって実際の生が可能になるもの、それぞれの民族の生存条件を示すものとする。貴族道徳と奴隷道徳という道徳の二つの類型は人間の類型に対応する。道徳を生から捉えた上でニーチェは従来の、現行の道徳を奴隷道徳として批判するが、彼の批判は単なる否定ではなく自己克服の為のものである。つまり、彼の道徳批判は道徳一般の正しい理解や一切の道徳の支配からの脱却を目指すものであるより、彼がその内に生きて居たキリスト教道徳を捉え直し、それを克服したところにこれからの人間の可能性を開く為の試みであったと位置付けられるのだ。第二節では権力への意志概念の意義を論じる。この概念によって、世界は増大を求める力同士の関係として描かれる。力は他の力と関係し合い、その関係によって質を決定される。固有の道徳によって生きる人間、民族はそれぞれ他のものや外的なものと関わりその関係によって質を規定される力として捉えられる。第三節ではニーチェの道徳批判の核心をなす批判について考察する。それはキリスト教批判であり、キリスト教がニヒリズムであるという批判である。ニーチェの語るニヒリズムには幾つかの意味がある。一つには絶対的な価値はないと感じる価値のニヒリズム、また一つには絶対的な真理には到達出来ないという認識のニヒリズムである。そして何としても真理を知ろうとする意志は誠実性と表現される。これはキリスト教の徳であるとされる。キリスト教においては神が真理であり、真理が神であるからだ。誠実性を血肉化し、それによって生きる者は、人の世で価値のニヒリズム・認識のニヒリズムに至る。だがニヒリズムとはキリスト教の内に初めからあったものでもある。キリスト教がニヒリズムであることを端的に表す語が神の死である。『ツァラトゥストラ』で語られる神の死を解釈するのに重要な心理が同情と羞恥である。人間に対する同情のあまりに神が死に、最も醜い者はその醜さを神に見尽くされたために神を殺害したという、これは一つの事件と捉えられるべきである。全てを見尽くす神の眼差しはそれを欲する人間の苦しむ生から形成された、しかしそのますます重くなる生の苦しみ、酷くなるその身体の弱さ・醜さによって、やがて彼は見られることに耐えられず、羞恥のあまりに見尽くした神に復讐するに至った。神の死とはそのような、初めに既にあり其処からそのものが形成されているところのものが必然的に顕現した、一つの歴史なのだ。ニヒリズムはキリスト教の内から出現するが、ニーチェはその克服の可能性もキリスト教の内に生まれた者の中から萌すと見ている。彼の道徳批判の意義は其処にある。

己がどのようなものであるかは如何にして知られるかを問う第二章では身体が手掛かりとなる。ニーチェが身体と言う時、それが指すのは一人の人間或いは何等かの生物個体の手や足や目や耳や内臓等々の総合としての、物理的存在物のみを意味するのではない。ニーチェ独自の身体概念は彼の権力への意志という根本概念から、また彼以前の哲学者の世界観や彼の時代の生理学の成果を受けて形成されたものとして捉えられるべきである。第一節ではこの身体概念とその分析・診断について論じる。後期ニーチェ思想における身体とは一つの力の総合であり、身体には自己と情動という二重の意味がある。これを分析する方法は感情という症候の解釈となる。この方法のゆえに

ニーチェは自らの観点を生理学的と称し、その生理学はまた心理学でもあるのだ。第二節ではニーチェのキリスト教批判について論じる。彼の身体概念によれば、様々な精神的・心理的と思われる現象も何等かの身体的症候であり、或る道徳を或る身体現象として捉え、診断することが出来る。その意味でキリスト教とは、それ固有の履歴を備え一定の性格を示す身体なのだ。そしてニーチェはキリスト教という身体にデカダンスという診断を下す。キリスト教とは自らを衰えさせ、力を弱め、生を阻喪させようという意志であり、そのように意志することで生きようとする身体であるとされる。此処でもキリスト教の同情が問題となる。同情とは他人の苦しみを自ら苦しみ、自らの苦しみを他人に苦しませる、感染性の苦である。同情が徳とされているところでは苦が生となり、この苦しみに耐える為に苦しみを感ずるまいと、一切の刺激に触発されまいとする。それは病気の内で、病気によって生きようとする意志である。第三節では身体から捉えられた認識という作用、意識について論じる。西欧の思想史には心身二元論的な伝統があり、それはニーチェの時代やそれ以降に問われ直すものとなる。ニーチェは精神・意識をその伝統のように身体から独立的なものと位置付けるのではなく身体から捉え直す。認識が身体的作用として、意識は身体的諸作用の連鎖の末端として捉え直されるのだ。其処では認識は図式化であり、意識は図式による伝達の効率の為に発達したものとされ、主体概念も因果律も、そのような自己意識や図式の信仰から形成されるものとなる。そのように捉え直された時、意識を身体とは独立的なものと見なすこと、また更に意識や精神の過重視は、あまりの苦しみを感じる身体に生じる、意識という身体の一器官がなす、身体の自己切断と言うことが出来る。

己が誰であるかを知ることで人は何になるのかを問う第三章では手引きとなるのは知恵である。ニーチェの記述に現れる知恵とは、決して哲学の伝統の中で用いられて来た知性や理性と同一のものではない。彼は伝統的な真理観を批判する、それがキリスト教によって育まれて来たものと見なすからである。ニーチェの道徳批判、キリスト教批判は知の問題へと至り、彼は従来のものとは異なる真理の意味とその探求の可能性を探ろうとする。第一節ではキリスト教批判に連続する真理批判を考察する。認識は身体と不可分のものであるがゆえにこれまでの哲学はキリスト教がそうであるのと同様、デカダンスであったとニーチェは考える。何故ならそれ等はどちらも永遠不変の真理の存在とその至高の価値を当然の前提としているのだから。此処にあるのは一言で言えば存在者の信仰である。この信仰が示唆するのは確実性への欲求であり、確実性の欠如である。ニーチェの批判がこれまでとは別の、より良いものの確証を与えるものでも新たな理想を明示するものでもないのは、そのような確証への欲求が弱さの徴にほかならないからである。第二節ではニーチェの記述に現れる女の表象を取り上げる。彼が伝統的な真理探究の克服を目指して描く真理の姿は、神なる真理・父なる神に対して、真理という女である。女の表象によって、真理は生と性的なものに結び付けられる。ヴェールを纏う女、その姿を見せて男を誘惑する女のようなものとしての真理、それはヴェールの表面にヴェールの奥のものとして見えるものである。この表象が描くのは女自体の不在である。ヴェールを剥ぎ取った時には求めていた女は姿を消す。彼女は羞恥を弁えており、ありのまま、そのもの自体というあり方や求め方の不躾さを知っているのだ。羞恥する真理という表現によって、従来の哲学が依拠して来た直接的自明性や存在者の信仰が批判されている。『ツァラトゥストラ』ではツァラトゥストラという男と生と知恵、二人の女との三角関係が語られる。男にとって二人の女はよく似ており、一方を求めているつもりが他方を追い、他方を追っていたつもりで一方を求めている、それで二人の女は互いに嫉妬する、このような関係があるとされる。この二人の女、生と知恵とは嫉妬によって彼を誘惑している。生のなす誘惑は知恵への誘惑となり、知恵のなす誘惑は生への誘惑となるのだ。このような関係に類比される哲学という営みは、知恵の手引きによって生を探求するというものである。生を直接捉えることは出来ない、生についてはそれから生み出される真理、真なる思想によって窺われる。真なる思想は生から知恵の手引きによって引き出される。知は決してそれ自体が目的なのではなく、生と関わる為の手段である。生と知恵との関係は身体と精神に類比的である。知を身体から捉え直し、身体の発展の可能性を探るニーチェにとって、哲学とはそのような努力であったと言える。最後に第三節では未来の哲学について検討しておく。従来の哲学を批判し、それとは異なる哲学への希望を、ニーチェはこの語で表現している。

以上によって、後期ニーチェ思想における道徳批判、それを形成するニーチェの諸概念の独自性を取り出し、彼の批判において洞察されている心理、強さ、弱さ、同情、羞恥についての解釈を呈示すること、これが本論文が目指したところである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 生島弘子 ）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	須藤訓任
	副 査	大阪大学　教授	上野　修
	副 査	大阪大学　准教授	舟場保之
	副 査	大阪大学　准教授	中村征樹

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：哲学者は如何にして知を愛したか―後期ニーチェ思想における道徳・身体・知恵―

学位申請者　生島弘子

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　須藤訓任

副査　大阪大学教授　上野　修

副査　大阪大学准教授　舟場保之

副査　大阪大学准教授　中村征樹

【論文内容の要旨】

本論文は、1880 年代半ば以降の後期ニーチェの思想について、哲学者としての自己に焦点を絞り、その自己の存在の来歴を明らかにし、自己存在の認識を図り、そしてその認識を通した新たな自己生成の可能性を探ろうとするものである。哲学者としての自己とは単にフリードリヒ・ニーチェ個人を指すだけでなく、2 千数百年に及ぶヨーロッパの社会・歴史・文化に支えられ制約された存在としての自己であり、そうした存在としての自己と、自己の制約としての社会・歴史・文化を問題視する哲学者のことをいう。この意味での自己存在をテーマとするために、本論文は、「はじめに」と「終わりに」を除いて、三章から構成される。三章の題名は順にそれぞれ「道徳　人は如何にして現にあるところのものになるか」、「身体　己がどのようなものであるかは如何にして知られるか」、「知恵　己が誰であるかを知ることで人は何になるのか」であるが、題名の最初に挙げられた三項目が全体の副題の内容ともなっている。そして各章はまたそれぞれ、「序」と「結び」に挟まれた三節からなっている。

第１章は「道徳批判」、「権力への意志」、「ニヒリズム」の三節から成立しているが、なにより道徳を俎上に載せる。それはニーチェによれば、ヨーロッパにおいてはキリスト教道徳こそが、自己存在の何たるかを最も根本的に規定してきたからである。その際強調されることは、生に敵対しその衰弱を招いたキリスト教道徳にはその本質的性格として「誠実性」が内蔵されていて、それがキリスト教に潜在していたニヒリズムを顕在化させてキリスト教信仰を没落させるとともに、他方キリスト教道徳としての誠実性それ自身の克服も示唆されているということである。ここではまた、「神の死」というヨーロッパの歴史を画する事件における「羞恥」の重要性も指摘される。「症候と解釈」、「キリスト教と生」、「認識と懐疑」という三節を蔵する、続く第２章は身体をテーマとする。ニーチェは道徳や宗教など、通常精神に属するとみなされるものはみな身体現象であるという。したがって、人間に関する一切は身体として、そして身体のなんらかの状態を表現する症候として理解されねばならず、すべては身体の如何に依存する。しかるに、精神が身体から独立した存在であるかにみなされるのは、弱体化した身体の自己切断のなせる業にほかならず、こうした身体の転倒こそが正されねばならないとされる。

最終第３章は知恵としての哲学の可能性を追求し、新たな真理概念の創成を試みる。そのために「真理批判」、「女の問題」、「価値創造としての知」の三節をその構成部分とする。本章での力点はなかんずく「女」の形象の

解明に置かれる。『ツァラトゥストラ』などに描かれた謎めいた女の姿態は「真理」の新たな形、ある意味では無形の形と言わざるを得ない形を示唆したものである。それは、永遠不変の存在（＝神）としての従来の真理概念を廃棄する、存在―生成、真理―虚偽、男―女、精神―身体などといった二項対立構造そのものを掘り崩し、深層の本質を隠すかに装う表面としての真理であり、その境域において展開されるであろう、哲学と芸術との共通性と差異性とが展望され、本論文は閉じられる。分量としては、目次、参考文献表を含め、A4 横書きで総 163 頁である。

【論文審査の結果の要旨】

三章それぞれの章題にある「人は如何にして現にあるところのものになるか」、「己がどのようなものであるかは如何にして知られるか」、「己が誰であるかを知ることで人は何になるのか」の相互関係は一見したところ分かりにくいが、これは熟慮の結果である。というのも、最初の疑問文は自己存在が歴史的由来に本質的に規定されていることを踏まえ、第二のそれは、そうした歴史を担った存在をそのものとして知るための視角に対する問題意識に基づき、そして最後の問題は第二のそれで明らかにされた自己認識によって示される、自己の新たな可能性への眺望を切り開くものとして位置づけられているのだからである。そうした問題のそれぞれに対応するテーマが「道徳」「身体」「知恵」であるが、それらをさらに総合する全体的問いが本論文の題名「哲学者は如何に知を愛したか」なのであり、それに対する答えが、最後の最後に述べられる、「己がそれであることについて、そのようにあらしめたものについて、身体について問い、喜びをもって生を愛する、そして人間の未来を待望する」、ニーチェとはそのような哲学者であった、という一文である。全体の中では第２章の身体および身体の自己切断としての精神に関する解釈は議論も比較的明快で、示唆に富んでいる。

ただし、各論的には問題も目につく。第１章でニヒリズムを解くカギとして挙げられた「羞恥」はまた、第３章で「女」のそれとして、新たな真理の姿かたちを示唆するものとされるが、両者の関係が問題となることは自覚されてはいるが、それの論究は曖昧なままにとどまっている。また本論文の最重要部分である、「女」に関する解釈もそれなりの説得性を有してはいるものの、新たな真理概念の提示としては具体性の追求に欠けるようである。また、論述の運びやテーマの連結が、そのやや特異な文体とも相まって、ときに滞るような印象がある。さらに、論究された二次文献と突っ込んだ議論の発展もあまりみられない。とはいえ、全体として、堅実な理解力と独自の問題意識に支えられたニーチェ解釈として評価されてよい。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものとして認定する。